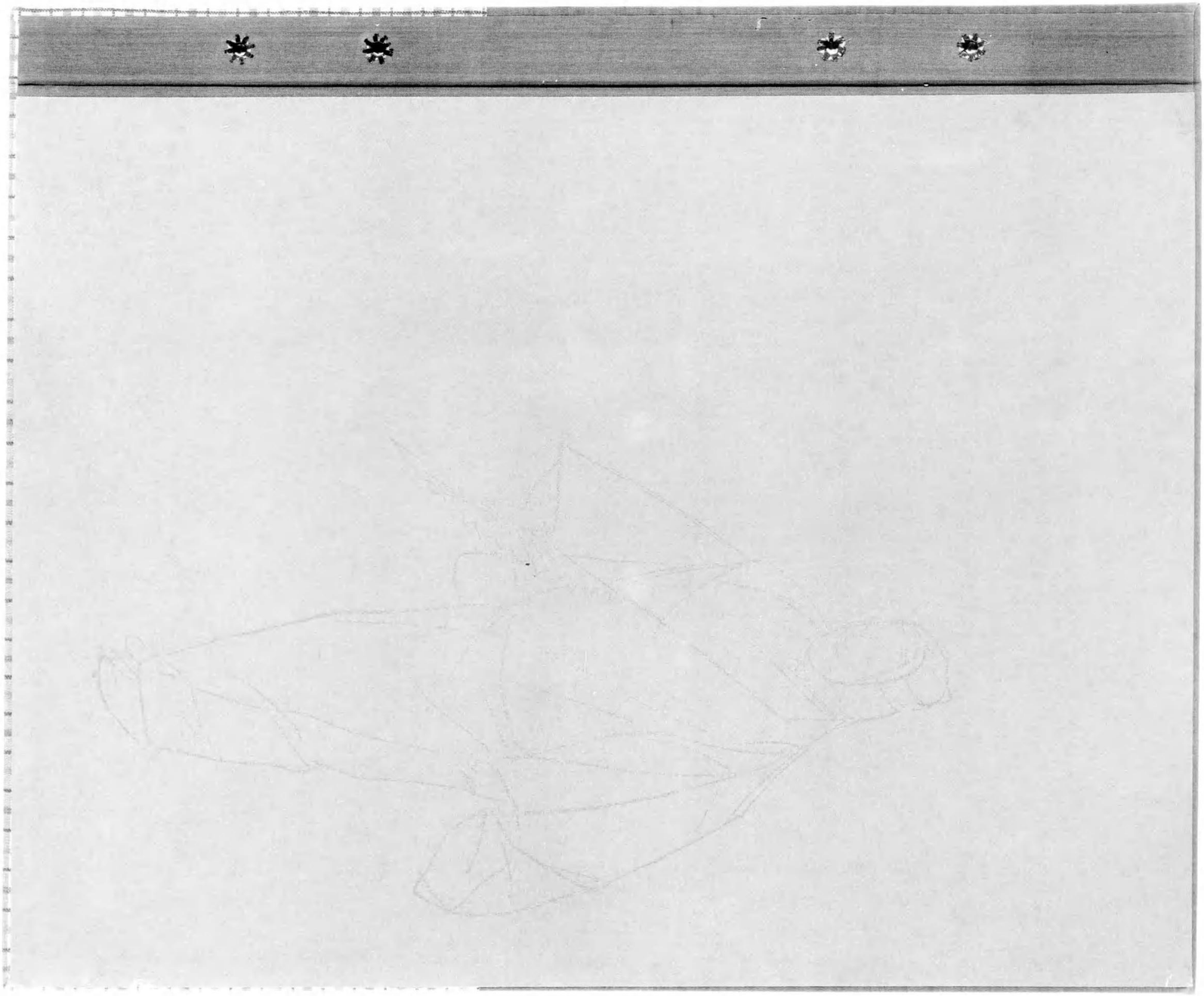
始



序

能樂は、平安の優婉を母とし、鎌倉の雄勁を父として生れた。

そして能裝束は、すでに、室町の娟美と桃山の豪麗とを閲し、江戸に到り及んで豐豔の極に達したのである。

これに反し、演能の技法は、相つぐ武家時代の、健剛の氣に俟つて、專ら簡素を旨とする形式に成つて行つた。却つて能藝術に緊密であり、が、以上の兩傾向は、矛盾の如くして、その特性たる典雅、幽玄、莊重の趣を倍々濃やかならしめた。

かも這裡に、なほ考察を要するは、當時の封權制度が天下に布くに恭儉の風を以てして嚴なりし結果、各藩はその富力をよく內に潛めつゝ何かに具象化させてゐた消息である。やがてそれの凝るところは、或は糸に織り布に染めて金銀箔の贅費を各まず、或は刺繡絢爛の巧緻を方寸の隅まで施して倦まず、即ち唐織となり、厚板となり、繡箔となつて、こゝに千古に耀く錦衣を世に遺したのであつた。

本集に收むるこれ等の佳什、すべて各名家の秘藏に拘はり、もとより累代文化の精粹と曰ふべく、吾邦工藝の中樞として、宇內に誇るに足る。

曾つて幾多の名匠上手がその袖裳を翻して、滿堂を幽玄の境に誘ひし歷史の重れる色彩もあらう。庫奥篋底に年空しうして典雅の綺紈を未だ世に示さゞりし尊き文樣もあらう。

遮莫、いま圖を覽つゝ想へば、まさに百草の妍を競ふ苑に逍遙游すると齊しいものがある。

昭和十一首夏

編者識

能装束名品集　續　第壹圖

黑紅色籠目地柳樹繡箔

使用――〔安達原〕〔鐵輪〕等。

東京　長尾欽彌氏藏

能裝束名品集　續　第　貳　圖

紅白萠黃段　繋麻葉菊花文　唐織

大阪　山中定次郎氏藏

使　用――本三番目能の艷冶なる　シテ〔江　口〕〔楊貴妃〕等。また〔花　筐〕〔班　女〕等。

能裝束名品集　續　第　參　圖

茶薄黄淺葱段　紫苑竹鐵仙文　繡箔

京都　山中松治郎氏藏

使　用――〔通盛〕〔花月〕〔佛原〕〔浮舟〕等。また〔卒都婆小町〕にも。

能裝束名品集　續　第四圖

紺地岩波鱗繡箔

使用――〔海人〕〔鐵輪〕等。

大阪　山中定次郎氏藏

能裝束名品集　續　第五圖

色々市松地　紋盡　大龍丸　唐織厚板

使　用――〔籠〕〔兼　平〕〔大江山〕〔望　月〕等。

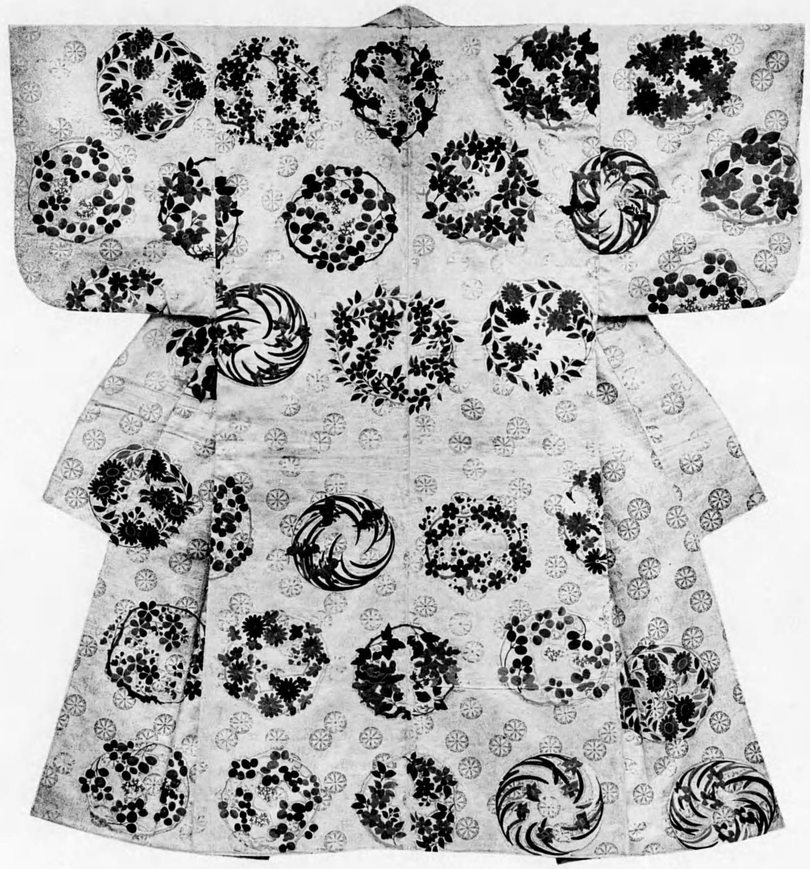
大阪　山中定次郎氏藏

能裝束名品集　續　第六圖

白地小車散華丸繡箔

使用――〔敦盛〕〔經政〕また〔羽衣〕等。

大阪　山中定次郎氏藏



能裝束名品集　續　第七圖

紅白段　繡龜甲地　櫻菊花籠文　唐織

大阪　山中定次郎氏藏

使用――本三番目能の婉麗なるシテ〔井筒〕〔江口〕等。また〔三輪〕〔玉葛〕及び〔殺生石〕〔舟辨慶〕等。

能裝束名品集　續

第八圖

淺黄崩黄段　銀摺文　花技繡箔

使用――〔朝長〕〔知章〕〔杜若〕等。

東京　長尾欽彌氏藏

能裝束名品集續　第九圖

紅淺黄大段　藤懸扇散　唐織

使用――〔浮舟〕〔葵上〕〔三山〕等。

大阪　山中定次郎氏藏

能裝束名品集　續　第拾圖

紅地金簾華丸文様唐織

大阪　山中定次郎氏藏

使用――優婉なる女のシテ〔熊野〕〔草紙洗小町〕〔東北〕等。

終

能楽東名品集 後
昭和十一年六月十五日印刷
昭和十一年六月二十日發行
定價金八圓

著者 東京市目黒区富士見臺一五四九 松野奏風

發行者 京都市中京区寺町通二條南入 合名會社 芸艸堂出版部

印刷者 京都市上京区衣棚今出川北入二〇六番地 中島泰成閣

不許複製

發行所 京都寺町二條南 電話上京二九〇番 振替大阪二五八番 合名會社 芸艸堂
東京本郷湯島一 電話下谷三六〇〇番 振替東京四〇九四〇番